

THE VINES

このアルバムはある意味旅のようなものだと思う 聴く人を旅に連れ出すことが出来たら最高だね！

21世紀を牽引するロック・バンド＝ザ・ヴァインズ、2004年を動かす新作完成！！インタビューで無垢な“音楽愛”に加え、有機的ポテンシャルを発揮した彼らの底力を聴くべし！！

インタビュー◉播磨秀史　通訳◉勝田智子

**5年後には解散して、ソロ・プロジェクトをやってると思うよ
そうなってたらいいね
あと数年は一緒にいると思うけど……そうだな、あと5年は活動するんじゃないかな
そのくらいバンドが続けられるよう、健康で生き続けたいね(笑)**

**年を重ねるごとに怒りという感情が減っていくんだよ
そして、アコースティック・ギターだって
エレキと同じぐらいクールなサウンドを出す楽器だって気づくんだ
いや、時にはエレキ以上に最高なサウンドを奏でられるってね**

大変な聴き応えである。ザ・ヴァインズ期待のセカンド・アルバム「ウィニング・デイズ」。デビュー作「ハイリー・イヴォルヴド」でその引き出しの多さと深さはわかっていたが、今回はその地力に「やりたいことを形にする」明瞭な視野が加わったもんだから、より力のあるアルバムとなった。もちろん聴いていて楽しいのだが、あまりの内容の濃さに、聴き終わると軽い目眩を覚えてしまうくらいなんである。

「ハイリー・イヴォルヴド」が、まるで幕の内弁当のように「これが僕たちの全てです」と次から次へと目まぐるしく様々なタイプの曲を提示したのと比べると、今作はおおむね前半が「ダーク＆ヘヴィ・サイド」、後半が「メロウ＆フォーキー・サイド」となっていて、かなり整理されたというか、全体を見渡してまとめた印象だ。しかし、この前半だの後半だのはあくまでも大掴みなイメージであって、それぞれの曲は独自の表情を見せ、アルバム全体はやっぱり万華鏡のようにクルクルと多彩、本当に懐が深いバンドである。

前作以上に豊かなヴォーカル＆コーラスと、ツアーで鍛えられてしなやかな筋肉を身に着けたバンド・サウンドも、この新作の大きな魅力となっている。その前提としてあるソングライティングの確かさはもちろんで、フックのあるメロディやリフは満載。それを最大限に生かすアレンジメントも、21世紀のエッジと懐かしさを覚える普遍性が無理なく共存、どんな音楽も否定しない"全方位的音楽外交"により培われた柔軟性が、存分に機能している。

特にタイトル・チューン"ウィニング・デイズ"が扉を開け放つようにして始まる後半の充実振りが素晴らしく、クレイグ・ニコルズの美しいヴォーカル＆コーラスが伸びやかに広がり、ストリングスやメロトロンもフィーチャーされたサウンドはエモーショナルで感動的。何だかホンワカと切ない気持ちになってしまう。

取材のオファーをしてから随分経ち、もう今月はダメかとあきらめかけた締め切り間際に、何とかロスで移動中のクレイグをケータイで捕獲することに成功。電波状況が悪くやや集中力を欠いた内容になってしまったものの、2004年最初の世界注目盤を仕上げ、音楽に向かうピュアな気持ちが盛り上がっているクレイグの様子は十分伝わるはずだ。

——幕の内弁当的だったファーストに比べると、より焦点が絞れた印象のセカンド・アルバムが完成しましたね。

「そうだね、やりたいことの焦点がより定まっていると思うよ。音楽的にやりたかったのは……曲を表現すること。僕たちはそういうバンドなんだ。つまり曲がバンドを形成するんだよ。そうだな……何て言うのかな……絵画のようなものさ。僕が歌詞を書くから内容はパーソナルだけど、別に自伝ってわけじゃない。単にストーリーを書いているだけだ。どんなものであれ、クリエイトするのって楽しいしさ。将来的にはコンセプト・アルバムを作るロック・バンドになりたいね」

——それは楽しみです。前作に比べて、ちょっと離れて全体も眺めたりしながら作ったというか、トータルに考えて作られたセカンドのように思いました。

「バランスが凄くいいと思うんだ。今の僕たちの姿を忠実に描いていると思うし、音楽的にやりたいこともしっかりと表現出来てる。今回はやたらと楽器のパートを重ねることはしたくなかった。なるべくシンプルにしようと思ったね。でも面白いヴォーカル・パートはたくさん入れることが出来たと自負してるよ」

——前半がダークでラウドでノイジーなイメージ、後半が穏やかでメロウなイメージという構成になっていますが、これにはどんな意図があったんですか。

「別に深い意味はなくて、これがベストな曲順だと思っただけさ。今回の曲はかなりヴァラエティに富んでて、ある意味旅のようなものだと思うんだ。だから、僕はこのアルバムを気に入ってるんだよ。聴く人を旅に連れ出すことが出来たら最高だね！」

——それぞれの曲については、激しいものはより激しく、メロウなものはよりメロウと、それぞれにより磨かれて深い表現になっています。

「意識的に僕たちはバンドという形態で演奏するけど、バンドとして演奏する時、『よし、ヘヴィな曲をやるぞ』とか『メロウな曲にしよう』とか『次はバラードを書くぞ』なんて自分たちに言い聞かせるわけじゃないんだ。意識的なものじゃないね。これがバンドの真の姿なんだってことさ。僕たちは色んな音楽をたくさん聴くから、そうすることで培ったものを自分たちの曲に取り入れたいだけなんだ。その方が面白いと思うから。同じことばかりやるなんてつまらないし……。ま、今後どういう風になっていくかはわからないけど」

——ツアーの賜物か、バンド・アンサンブルが凄く豊かになっていると感じました。バンドの成長を実感した具体的な瞬間とか、何かありました？

「アルバムがほとんど完成した時だよ。色んなことがより理解出来るようになったんだ。例えばレコーディング方法の細かいこととかね。昔から僕たちはそういうことに興味があったんだけど、今回は自分たちで曲を録音することが出来た。今は、凄く満足した気分で一杯だよ」

——音の一つ一つの意味がしっかりあるというか、研ぎ澄まされながらも遊びもあるというか……「ソリッドで豊か」という印象です。

「そうだね。大抵の場合、どういう曲に仕上げたいかっていうヴィジョンがはっきりあるんだ。『アコースティック・ギターはこういう風に弾きたいな』って具合にね。3つのコードだけで奏でる曲には魔法的な魅力があると思う」

——よりシンプルな方がより雄弁である、と？

「そうだな……一概にそうは言えないと思うけどね。複雑なレコーディング手法を取った曲やディープな言葉を使った歌詞の曲だって、いいものはいいだろう？　僕が思うに、人それぞれの好みだよ。自分がいいと思うものがベストなんだ。自分が共感出来る曲、それが大切なわけでさ。シンプルでもそうじゃなくても、いいんだ」

——顕著なのが、ヴォーカリゼーションの素晴らしさです。ヴォーカルの表情の豊かさにしろ、コーラス・ワークの良さにしろ、前作と今作ではヴォーカルへのアプローチもかなり違ったのでは？

「う〜ん……そうでもないかな。ファースト・アルバムを作った時も、全ての曲のヴォーカルを違う雰囲気のものにしたかったんだ。そして今回のレコーディングの時も同じような考えが頭の中にあったから。曲を書いている時に頭の中にあったアイディアを、最大限に表現したいと思ってた」

——個人的には、フォーキーでおおらかな"サンチャイルド"で終わる形もあるかなと思ったんですが、最後を"ファック・ザ・ワールド"でワイルドかつラウドに締めた理由は？

「まあ、いつかはアルバムを終わりにしなくちゃならないからね。アルバムの締めくくりとして最高なメッセージが入った曲だと思ったから、これにしたんだ」

——なるほどね。冒頭曲"ライド"は、「ザ・ヴァインズの音楽に乗って一緒にどこかに行こう！」と誘っているようなイメージです。アルバム全体で「ここじゃないどこか」「今じゃないいつか」「現状では足りない何か」を思い求めているようなところはありますか。

「そうかもしれないね。時には大げさに歌詞を書いていることもあるけど、その時に本当にそう思ってることもあるんだ。だから……そうだね、僕はそういう想いを持ってるのかもしれないね。でも曲によっては単なるポエトリーであって、別にパーソナルな気持ちを表現しているわけじゃないんだ。ネガティヴな内容を書こうと思ったわけじゃないし、ネガティヴな曲だとリスナーに感じてもらいたくもないな。ただ……そういう想いを持った時、曲を書くことによってそれを乗り越えようとしただけさ。ま、僕たちはみんなに楽しんでもらいたいだけだし、みんなが楽しんでくれるアルバムを作りたいだけだよ」

——それにしても、スーパーグラスにしろステレオフォニックスにしろ、イキのいいスタートを切ったバンドはその後メロウでアコースティックな方向で成長することが多いです。あなたたちにも最初からそういう面があったとは言え、やはり新作ではそちらの進化が顕著ですよね？

「年を重ねるごとに怒りという感情が減っていくんだよ。そして、アコースティック・ギターだってエレキ・ギターと同じぐらいクールなサウンドを出す楽器だって気づくんだ。いや、時にはエレキ以上に最高なサウンドを奏でることも出来るってね。今後僕たちがどういう方向に進んでいくかはわからないけど。アコースティックな方向に行くかもしれないし、それとは全く逆の方向に行く可能性だってあるし」

——前作は制作途中でドラマーが抜けたりして、バンドとしてまとまった形で作ったものではなかったですよね。今作が初めて4人のバンドとして自分たちを表現し切れたのでは？　あのデビュー・アルバムを予告編のように感じたりとか？

「どうだろう……難しいな。もしあのアルバムをやり直すことが出来るなら……。まあ、あのアルバムではやりたかったことの80%を実現出来たよ。いや……わからないな。5%だけだったかもしれない（苦笑)。でも、あの作品はあれでいいと思う。

一つはっきり言えるのは、アルバムを作る度に、アルバムを作れることに心から感謝してるってこと。スタジオでは1分たりとも無駄にしたくないから、曲作りはもちろん、歌詞もアレンジも全て固めてからレコーディングに入るんだ。僕たちはアートの為にこういうことをしてる。金や名声の為じゃない。もちろんそういう世界に今はいるんだけど、作品は凄く抽象的なものだから」

——デビュー作での成功は、あなたたちにより自由を与えてくれたと思いますが、時にはクレイジーになり過ぎて大変では？

「そうだね……でも僕たちは音楽が好きな連中ってだけさ。音楽を聴いて、他のバンドのライヴを見て、他のバンドのプレイを聴くことを楽しんでいるだけ。そして、こういう風に活躍するバンドの一員になれて嬉しいよ。成功の度合いなんて、自分たちでコントロール出来るものじゃないんだ。どれくらい成功するかはコントロール出来ない。自分たちがどれだけ成功に左右されるかっていうのは、コントロール出来るのかもしれないけど……あまり成功うんぬんなんて考えないね。大切なのは、自分たちがやってることに無理がないこと。自分たちの音楽を信じてるからやり続けたいし……そうだな……みんなに僕たちの音楽を聴いてもらいたいのはもちろんだけど、別に周りのテイストに合わせるために死ぬような思いをするつもりはないっていうか。

あ〜、つまり要するに、倒れるまで仕事をする気はないってことを言いたかったんだ。別に本当に死ぬとか、そういう意味じゃないよ。死っていうのは微妙な課題だから、気をつけないとね」

——はい。長いツアーや移動のストレスで大変だったみたいですが、デビュー・アルバムの成功から得た最も大きなものは何でしたか。

「バンドであり続けることが出来る点。自分たちのエネルギー全てをバンドに注ぐことが出来る点さ。別に変わったことなんてないよ。昔も今も同じで、全ては幻想なんだ。唯一本物なのは音楽だけだよ」

——逆に、何か失ったものがあったとすると？

「そういうのはないね。僕たちは解散もせずに、セカンド・アルバムを作ることが出来たんだよ。僕たちは……僕たちは……自分たちがやってることが大好きなんだ。ちなみに、成功したからって何でも好きなことが出来るわけじゃないし、今までと違ったことが出来るわけでもないんだ。僕たちはそういう世界に住んでるんじゃない。今



大切なのは、自分たちがやってることに無理がないこと
自分たちの音楽を信じてるから、やり続けたいし……
みんなに僕たちの音楽を聴いてもらいたいのはもちろんだけど
周りに合わせるために死ぬような思いをするつもりはないんだ

この電話インタビューをハリウッドからやってるんだけど、僕はこの街が象徴する世界に……興味がないんだよ。言いたいこと、わかるかい？」

——ええ、よくわかります。このおよそ2年間、あなたたちは良くも悪くも“プロのミュージシャン”としてやってきたわけですが、音楽に向かう気持ちや姿勢に何か変化はありましたか。

「ああ。だって常に変化しているからね。そしてそれが音楽の素晴らしいところなんだよ。常に変わっているから僕を刺激し続けるんだ」

——具体的には？

「う〜ん……頑張って考えてみよう……今でも音楽は最高だと思うし、曲を書くこと、そして音楽というアートを作ることが楽しいんだ。曲を書くっていう行為には大きな可能性があると感じるんだよね。今後もどんどん追究していきたいことなんだ」

——あなたはアルバムのアートワークを自分でやるなど、アートも手掛けますよね。同じ自己表現でも、音楽とアートではどんなところが違うもの？

「絵や絵画は目で見ることが出来るけど、動きがないんだよね。そこから動くことがないし、それがいい点だと思うんだ。動きを求めている時は、逆にじれったく感じることもあるかもしれないけど。音楽は時と空間を超えて存在するけど、弱点は目で見えないという点。だからどっちも一長一短だよな。この二つを融合したものを作りたいって僕は考えてるんだけど、これはかなりぶっ飛んだ発想だからさ、実現するのはまだまだ先のことだし、じっくり考えてから実行したいね。バンドとして活動しなくなってからやりたいと思ってるんだ」

——今のところアートではなく音楽に注力しているのは、どうしてなんです？

「なぜだろうね……ガキの頃から歌うことが好きだったから……？　なぜだろう……わからないけど……気持ちいいことだからじゃないかな。心が落ち着く行為だからだよ。音楽のタイプによって、色んな感情を味わうことが出来るからかもな。そして何と言っても、パワフルになった気分になるのがいいんだ。カッコよくパフォーマンスすることが出来ると、すっごくいい気分になる」

——あなたたちの音楽には色んな要素がありますが、今のところあまりエレクトロニカ系の要素はありません。やっぱり人間が自分の手で鳴らす音楽に惹かれるのかな？

「確かにギターが凄く好きってこともあるけど、実はエレクトロニカももっと取り入れたいと考えてるんだ。まだ現段階ではコンピューターとかを駆使してレコーディングをするのは得意じゃないから……もう少し経ったらやってみたいと思ってる。でも、このアルバムにもそういう要素はちょっと入ってるよ。ま、確かにメインはギターだし、キーボードも少ししか入ってないんだけど」

——ギター・ロックにはまだまだ大きな可能性があると思いますか。

「わからないよ。悲観的な意見を言うつもりはないけど……どんな時代にもロック・バンドは存在したし、これからもロック・バンドは活躍し続けるんだ。バンドが多ければ多いほど、いいバンドと出会えるチャンスが増えるからいいよね。ロックっていうのは、色んなスタイルの音楽を指すだろう？　僕はケミカル・ブラザーズも好きだし、スーパーグラスだって好きだ。彼らはちょっと変わった音楽をやってた時期もあったけど、いい音楽であることには変わりはなかったから好きだったよ。その時の流行の音楽って常に変わるし、音楽自体も色んな形に変化していく。そして音楽のネーミングは人によって言い方が違うんだよ。別にどういう音楽かなんて、僕たちはいちいち考えない。いい音楽だったら聴くってだけさ。だからメディアが書くことなんて気にしないね。評判がいいか悪いかなんて関係ないし、その時のトレンドとかムーヴメントなんて関係ない。自分がやりたいことをやればいいんだよ。既存のポップ・ミュージックをリサイクルした音楽なんかより、ずっといいと思うけどな」

——じゃあ、今後の目標は？　5年後10年後のヴィジョンはどんなものです？

「そうだな……その頃には解散して、ソロ・プロジェクトをやってると思うよ。そうなってたらいいね」

——え？　5年後にはこのバンドは存在しないってこと？

「はっきりとはわからないけど、そうじゃないかなあ。あと数年は一緒にいると思うけど……そうだな、あと5年は活動するんじゃないかな。少なくともそう願うよ。そのくらいバンドが続けられるよう、健康で生き続けたいね（笑）」

——えっ？（苦笑）。

「いや、マジだよ。別に身の危険を感じるような状況に今いるってわけじゃないんだけど、僕たちは常に死を恐れているんだ」

——なるほど……。音楽活動を続けていく中で、いちばん理想的な“成長”はどんな形だと考えていますか。

「1日3食ちゃんと食べられること。たくさん水を飲んで、1日1回は日光浴をすること」

——ははは。普通のことができるってことですね。理想的な成長をしていて、リスペクトするバンドとかは？

「スーパーグラスだな。もの凄く尊敬してるんだ。ブラック・レベル・モーターサイクル・クラブもいいと思うし……その他にも凄いことをやってるバンドはたくさんいるよ。その他には……う〜ん……ごめん、頭が真っ白だ」

——（笑）今あなたは、このバンドを通して何を表現していきたいですか。

「未熟さ。知性。子供のような我が儘さ」

——ははあ。

「ウソウソ。ただ適当に言葉を並べてみただけさ。別に何かを表現したいってわけじゃないんだ。単に自分たちの曲を歌うだけ。そして僕たちの曲には、別にこれっていうメッセージがあるわけじゃない。だって単なる曲だからね。もし何か伝えたいことがあるなら、他のことをやってるよ。僕たちは……もちろんしっかりと責任ある行動を取りたいけど……向こう見ずな面もあるからさ……。その二つのバランスを上手く取ろうとしてるだけなんだ」■

PRESENTS

応募要項／プレゼント希望の方は、P.163のアンケートに答えて、〒101-8454 東京都千代田区神田錦町1-12-3-4F CROSSBEAT宛に官製ハガキ、封書又はFAX(03-3292-4149)でお送り下さい。HP(http://www.shinko-music.co.jp/cb/present.html)でも受付中！ 締切は3月10日です。



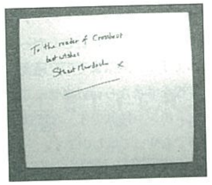
RED HOT CHILI PEPPERS

◆ジョン・フルシアンテの背骨であるレッチリ。昨秋発売のベスト盤の柄がプリントされたTシャツを5名様に(白・Mを3名、同・Lを2名)。【提供：ワーナー】



THE VINES

◆一回り大きなセカンド・アルバムを引っさげて戻ってきたザ・ヴァインズからは、オリジナル・デザインのTシャツ(黒・L)を2名様に。【提供：EMI】



BELLE & SEBASTIAN

◆大きなホールでのライヴも快調！ 歓喜の再来日を果たしたベルセバの首領、スチュワート・マードックの直筆サインを1名様に。【提供：編集部】



COURTNEY LOVE

◆見た目にも麗しいコートニー・ラヴの新イメージ。それが妖しく微笑みかけてくれる2004年のカレンダーを2名様に。立てかけも可能です。【提供：EMI】



THE MARS VOLTA

◆何もかもなぎ倒したマーズ・ヴォルタ台風の威力。「いつでも高ぶってろ！」と信念が書き込まれたセドリック・ザヴァラの直筆サインを1名様に。【提供：編集部】



THE CORAL

◆サイケデリックなザ・コーラルにふさわしい3Dグラフィックのカレンダー。ちゃんと3Dメガネも付いてます。こちらを5名様に。【提供：ソニー】



KASHMIR

◆初来日公演もいよいよ間近。デンマークのトップ・バンド、カシミールからは来日を祝してTシャツを2名様に(白・Sを1名、黒・Mを1名)。【提供：ソニー】



MUSE

◆激情サウンドと劇的な演出で度肝を抜いたミューズ再来日。進化を続ける爆裂ロック・トリオのメンバー全員による直筆サイン色紙を1名様に。【提供：編集部】



THURSDAY

◆ワープト・ツアーも好評だったサーズデイ。ジェフ・リックリィとトム・キーリィによる、CDブックレットへの直筆サインを5名様に。【提供：ユニバーサル】



SIKTH

◆『EXTREME THE DOJO』への参戦も決まった英国ヘヴィ新鋭、シクス。来日記念でTシャツを3名様に(白・S/M/L各サイズ1名)。【提供：ビクター】



THE VELVET TEEN

◆ミューとのカップリング・ツアーで新たなファンを獲得したヴェルヴェット・ティーン。Tシャツを4名様に(黒・M/L各2名)。【提供：ヴィレッジ・アゲイン】



◆「トトロ大好き！」なエヴァネッセンスのエイミーが描いたトトロ(？)入りの全員サイン色紙を1名様に。【提供：編集部】
◆カナダのキュートな女性シンガー、ネリー・ファータドの新作を祝してクリアケースを1名様に。【提供：ユニバーサル】
◆激しくエモーショナルな演奏を聴かせる米国の新星、ディスエンゲイジのステッカーを3名様に。【提供：デイメア】

● 「LETTERS」掲載の方にはプレゼントを差し上げます(応募が多い場合は希望の品以外になることもあります)。当選は発送をもってかえさせて頂きます。

2004.04 ENQUÊTE

●アンケートに答えてプレゼントをゲット!! このページを切り取るかコピーを送るもよし、ハガキでもよし。FAXでもメールでも無論OK。応募要項はP.162を。

FAX : 03-3292-4149 / E-mail : http://www.shinko-music.co.jp/cb/present.html

01. クロスビートは ①毎月買っている ②内容次第で買う ③好きなアーティスト／バンドが載っていれば買う ④初めて買った（理由：　　　　）

02. クロスビートをレジに持ってくポイント2つに○をつけて下さい。
①表紙 ②インタビュー ③特集・企画記事 ④フリーク・シーンなどの情報 ⑤レビュー ⑥その他(　　　　)

03. 今月号で面白かった記事は何ですか？
①(　　　　)
②(　　　　)

04. 今月号でつまらなかった記事は何ですか？
①(　　　　)
②(　　　　)

05. 今月号のP.131～P.159の中で心惹かれたコラムは何ですか?
①(　　　　)
②(　　　　)

06. 今月号のP.131～P.159の中でつまらなかったコラムは何ですか?
①(　　　　)
②(　　　　)

07. インターネットはどれくらい活用してますか？
①毎日見る ②2～3日に一回 ③週一回 ④使ってない
①～③の人はどんなサイトを見ていますか？
(　　　　)

08. 好きなお笑い芸人は？（※その理由も）

09. 最近良かったライヴ／CDの感想を聞かせてください。

10. 4月号の感想、本誌への要望、質問、批判、意見、文句など何でも書いてください。

※ 8～10の掲載者にはプレゼントを発送致します。

住所：〒

氏名：　　匿名希望の方はペンネームを (　　　　)　　性別： 男 ・ 女　　年齢：　　職業：

①レッド・ホット・チリ・ペッパーズのTシャツ（白・M／L）②ザ・ヴァインズのTシャツ（黒・L）③ベル＆セバスチャンの直筆サイン④コートニー・ラヴのカレンダー⑤マーズ・ヴォルタの直筆サイン⑥ザ・コーラルのカレンダー⑦カシミールのTシャツ（白・S／黒・M）⑧ミューズの直筆サイン⑨サーズデイの直筆サイン⑩シクスのTシャツ（白・S／M／L）⑪ヴェルヴェット・ティーンのTシャツ（白・M）⑫エヴァネッセンスの直筆サイン⑬ネリー・ファータドのクリアケース⑭ディスエンゲイジのステッカー